

第5節 岩宿時代以降の陥し穴の変遷とその背景 —特に縄文時代への系譜について—

1 陥し穴としての認識

縄文時代の陥し穴 地域的な形態的変異や時期的な消長はあるものの、陥し穴は縄文時代の代表的な遺構の一つであるといつてよい。そして、その形態や下部構造、配列性などの特徴は、石鏃や石槍などの石器とともに当時の狩猟のあり方を検証するための良い材料となっている。最近では、これまで事例に乏しかった九州地方などでも調査例が増加し、全国的に資料が蓄積されてきた。

その用途・性格に関しては、墓壙・貯蔵穴・陥し穴などの諸説があったが、神奈川県霧ヶ丘遺跡の調査を端緒として陥し穴としての評価が定着し、各地域で研究成果が公表されるようになった（今村 1973ほか）。これらの研究は、この種の土坑の形態的特徴や下部構造のあり方、群構成等の分析から、その狩猟形態に迫ろうとするものが多く、一部には民俗学・民族学的成果の援用もなされている。

岩宿時代の陥し穴 一方、岩宿時代の土坑については、東京都小金井市ICU Loc.15（小田ほか 1972）、新潟県川口町荒屋遺跡（芹沢 1959）、宮崎県佐土原町船野遺跡（橋 1975）、静岡県磐田市寺谷遺跡（山崎ほか 1980）などで散発的に事例が報告され、遺物などとの分布関係などから、貯蔵穴などの用途が推定してきた。その後、静岡県豊田町広野北遺跡（柳沢・山下 1985）で18基の土坑が検出され、水洗選別を含む詳細な検討がなされた。そして、その用途として墓壙・貯蔵穴・陥し穴が想定されたが、石器・礫と土坑群が同時期の所産であるとの認識から、今日陥し穴とされる土坑に類似する形態の土坑を含め、貯蔵穴としての用途が推定されることとなった。岩宿時代の土坑に陥し穴としての用途・性格が想定されたようになったのは、箱根西麓の静岡県三島市初音ヶ原遺跡の発掘調査が契機である。調査当初は広野北遺跡同様複数の用途が予想されていたが、地形条件に沿った配列性を有することや人為的埋め戻しの痕跡がみられないこと、および自然科学分析結果で内容物の残留成分が明確にならなかったことなどから、陥し穴群としての位置づけがなされるようになったのである。

岩宿時代から縄文時代への消長 最近では、箱根西麓を中心に愛鷹南麓・磐田原台地など静岡県下はもとより、南九州鹿児島県下や東京都内などで類例が報告されるようになり、その時期的消長や分布・形態変化についてもある程度把握出来るようになってきた。そこで本稿では、岩宿時代および後続する縄文時代の陥し穴の消長関係を明らかにし、その背景となった環境変化などについて概観してみたい。

なお、岩宿時代から縄文時代の陥し穴の消長に関しては、静岡県下の事例を中心とした成果が既に公表されている（小野 1993）。伴出遺物等の検討から、岩宿時代から縄文時代まで陥し穴の系譜が連續してたどられており、本稿の検討課題に関する先駆的な成果として重要である。岩宿時代の資料がさらに蓄積された現時点でも、その消長の大枠は変わらぬなく、本稿もその研究成果に負うところが大きい。

2 AT降灰以前の陥し穴の特徴と環境条件

時期的消長 今日、岩宿時代の陥し穴がもっとも集中して発見される地域は箱根西麓地域であり、その形態的特徴や群構成、時期的変遷を捉えるのに都合が良い。この地域では、初音ヶ原B遺跡・焼場遺跡A地点・加茂ノ洞B遺跡・下原遺跡などで、AT（始良T nテフラ：約2.5～2.1万年前に降灰）より下位の第Ⅲ黒色帶で陥し穴が集中的に検出されており、それ以前は全くみられない。また、箱根山麓の八田原遺跡でも、第Ⅲ黒色帶の時期にまとまって検出されている。

他の地域はどうであろうか。鹿児島県加世田市仁田尾遺跡では、ATより下位で見つかっている。また、東京都板橋区四葉遺跡（VII層上面：箱根西麓第Ⅲ黒色帶相当）でも同様である。したがって、現在

までに蓄積された事例から見る限り、A T降灰以前では第Ⅲ黒色帯相当期に陥し穴が出現し、その前後の時期には形成されないといえよう。

地域的分布 また全国的な分布をみると、箱根西麓・愛鷹南麓・南九州など、火山灰の供給が多いところに集中することに気づく。今回の下原遺跡・加茂ノ洞遺跡における基本層序や土坑覆土の植物珪酸体分析結果により、土坑構築以前に粗粒な火山噴出物が厚く堆積したため、それまで生育していた植生が破壊され、ススキなどに覆われた草地になった時期に、陥し穴群が形成されていることがわかった。

火山に近いこのような地域では、粗粒で熱を帯びた火山噴出物が多量に供給されたため、それまで成立していた森林相が破壊され裸地化する。その後、植生が復活する初期段階で成立した草地に、陥し穴群が構築されたと考えられるのである。この時期は、全国的にみて気候が寒冷化して行く時期であることから、このような大きな環境変化にともない、狩猟形態が変更された可能性もある。しかし、箱根西麓の尾根や谷ではこの時期、広範に陥し穴獣が展開されたが、その後その様な狩猟形態は継承されず細石器文化期まで断絶する。この間に、第Ⅲ黒色帯付近で見られた裸地化を示唆するような植物珪酸体組成の変化は認められないので、この時期この地域に限って起きた環境変化に対処するため、狩猟形態の変更を行ったと考えることもできそうである。なお、下原遺跡・加茂ノ洞遺跡の基本層序では、第Ⅱ黒色帯の時期にもススキの増加が認められる。今後、この時期の陥し穴が発見されるかどうか注目したい。

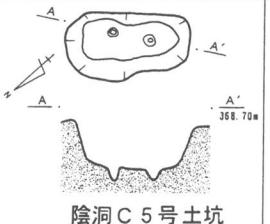
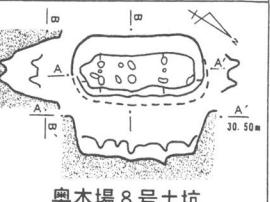
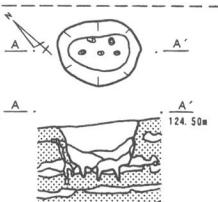
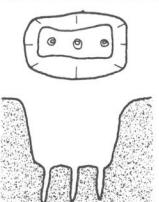
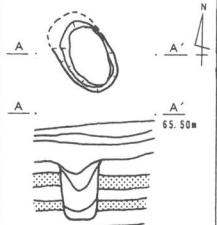
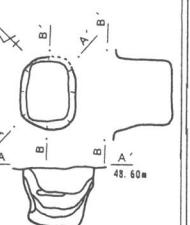
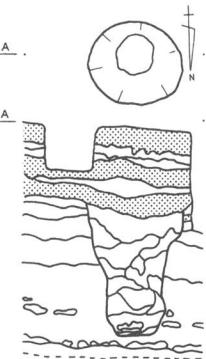
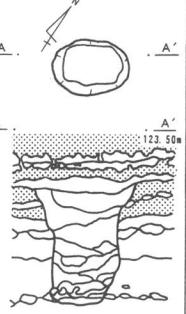
陥し穴の特徴 この時期の陥し穴は、直徑1m・深さ1~1.5mの平面円形、断面バケツ形で、逆茂木を立てたとされる下部構造は全くみられないのが普通である。伴出石器は少なく、尾根や谷を断ち切るように数基~十数基の陥し穴が列状に配列するのが特徴である。前述の通り、下原遺跡・加茂ノ洞遺跡における覆土断面の現地観察結果より、その埋積が土坑壁の崩落と周辺土壤の流入など自然堆積によるものであることは明白であり、墓壙と区別する際の大きな特徴となる。なお、覆土最下層の分析調査の結果、遮蔽物が上場にかけられた可能性は小さい。

3 細石器文化期以降の陥し穴の特徴と環境条件

時期的消長と地域的分布 細石器文化期以降縄文時代草創期の陥し穴群は、箱根西麓では下原遺跡（縄文時代草創期）、磐田原台地では広野北遺跡（ナイフ形石器最終末）、南九州では仁田尾遺跡（細石器文化期）などで見つかっている。また、縄文時代早期以降の陥し穴は、地域によって盛行期に差はあるが、ほぼ全国的に分布するようになる。細石器文化期は、いわゆる「寒の戻り」の時期にほぼ相当し、最近では単に冷涼化したのではなく多雨化したとも考えられている。その後縄文時代早期以降は気候が急激に温暖化し、縄文時代後期に寒冷化するまで、温暖な気候で比較的安定する。各地の縄文時代陥し穴群の形成は、ほぼこの間に盛行期をむかえている。ところで、この「寒の戻り」の時期は、考古学的にみても先行する時期の遺構・遺物が大きく変更された時期でもある。遺物では、A T降灰以前から主要な狩猟具であったナイフ形石器が小型化し、細石器・尖頭器へと移行する。遺構では、ナイフ形石器文化期に多用された礫群が衰退し、一部地域では石囲い炉や柱穴を巡らせる住居跡が出現する。また、縄文時代草創期になると、屋内炉を有する竪穴住居跡が確立する。

上述したように、下原遺跡の基本層序の植物珪酸体分析では、A T降灰以降Y L層までススキの増加が顕著でないことから、少なくとも第Ⅲ黒色帯に見られたような、スコリアの降下による草地化などの局地的環境変化はなかったらしい。したがって、この時期は気候変化をはじめとする大きな環境変化にともない、狩猟などの生産活動や居住の形態の変更が行われた時期であったと考えられる。

以下に述べるが、この時期の陥し穴は下部施設を有する点が特徴であり、後続する縄文時代早期以降の陥し穴（特に関東・東海・南九州地域）に共通する属性として注目される。このように、この時期の陥し穴は、上述したような大きな環境変化への対応策の一つとして成立し、新たな狩猟技術として縄文

箱根西麓	愛鷹南麓	磐田原台地	南九州
 <p>陰洞C 5号土坑 (縄文時代早期)</p>	+		 <p>奥木場 8号土坑 (縄文時代早期)</p>
 <p>下原 1号土坑 (縄文時代草創期)</p>			
			 <p>仁田尾遺跡 (細石器文化)</p>
	 <p>子ノ神 3号土坑 (A.T.降灰)</p>		 <p>広野北 9号土坑 (A.T.降灰)</p>
 <p>加茂ノ洞B 8号土坑 (A.T.降灰)</p>	 <p>下原 1号土坑 (A.T.降灰)</p>		+

第133図 旧石器時代から縄文時代早期の陥穴状土坑の変遷 (1/100)

時代早期以降へ継承され、確立し定着していったのである。

陥し穴の特徴 ナイフ形石器最終末の広野北遺跡では、いずれも下部構造を持たず、平面円形で直経1m・深さ1m程のAT以前の陥し穴に類似したものが多い。なお、2号土坑のような平面長さ1.5m・幅0.5mの楕円形で、深さ0.5mのものもあり、細石器文化期の陥し穴の形態に似ているが、下部施設は認められない。

一方、仁田尾遺跡や下原遺跡では、平面が長さ1m・幅0.5mの楕円～長方形で、深さが0.5m程度の、逆茂木をたてたとされる下部施設をいずれも持つものである。これらは、後続する縄文時代早期以降の陥し穴に共通する形態・構造であり、これらの先行形態の一つといえる。

4 結 び

以上、今回行われた箱根西麓下原遺跡・加茂の洞遺跡の発掘調査・現地観察・分析調査を契機に、岩宿時代から縄文時代への陥し穴の消長とその背景について概観を試みた。もとより、岩宿時代の陥し穴の本格的な調査研究はここ数年で緒についたばかりであり、地域によってはいまだに資料の蓄積段階である。したがって、今回の論点や推測も資料の蓄積や研究者間の討論の進展によって、再考あるいは訂正をすべきものであることはいうまでもない。これを機に、事実誤認を含め先学のご叱正を仰ぎたい。

ところで、本稿では陥し穴獵の成立に関して、AT降灰以前の局地的環境変化と細石器文化期から縄文時代草創期の「寒の戻り」という大きな環境変化を背景として指摘した。しかし、陥し穴の調査事例の多寡ばかりではなく、このような環境変化の実態を明らかにするための分析調査事例が、本地域以外ほとんど得られていないのが実状である。したがって、本稿で述べた推論もあくまで想像の域を出ないものが含まれていることをお断りするとともに、今後岩宿時代の陥し穴が集中して検出される地域（たとえば南九州や磐田原台地など）で分析調査成果が蓄積されることを切に願うものである。また、今回は岩宿時代から縄文時代へ消長をたどったが、いづれは縄文時代から遡ることを試みたいと考えている。縄文時代の陥し穴は、先学諸氏が指摘する通り形態的な変異が非常に多いため、今回のように一系的な系譜で消長を説明するのは不十分と考えるからである。縄文時代の狩り場の景観を含め再考したいと思う。 (辻本)

〈参考文献〉

- 伊藤 健 1987 「土坑群の構造把握—狩猟領域立地研究序説—」(『館町遺跡III』, 八王子市館町遺跡調査団, p.409-440.)。
- 今村啓爾 1973 「霧ヶ丘遺跡の土壤群に関する考察」(『霧ヶ丘』, 霧ヶ丘遺跡調査団, p.131-159.)。
- 小田静夫・小山修三・J.E.キダー 1972 「国際基督教大学構内Loc.15の先土器時代文化」(『人類学雑誌』 80-1.)。
- 小野真一 1993 「先史時代の陥穴について」(『伊豆堇山カントリークラブ地内遺跡群—ゴルフ場増設に伴う発掘調査報告書—』, 加藤学園考古学研究所, p.79-107.)。
- 芹沢長介 1959 「新潟県荒屋遺跡における細石刃文化と荒屋型彫刻刀について(予報)」(『第四紀研究』1, p.174-181.)。
- 橋 昌信 1975 「宮崎県船野遺跡における細石器文化」(『考古学論叢』3, p.1-69.)。
- 辻本崇夫 1987 「礫群の形成過程復原とその意味」(『古代文化』39-7, p.2-17.)。
- 辻本崇夫 1993 「細石刃文化期の遺構」(『シンポジウム細石刃文化研究の新たなる展開Ⅱ 細石刃文化研究の諸問題』, p.235-251.)。
- 山崎克己・保坂康夫・山口卓也・鈴木忠司 1980 「土壤」(『寺谷遺跡発掘調査報告書本編』, 平安博物館, p.100-109.)。
- 柳沢 順・山下秀樹 1985 「土坑」(『広野北遺跡発掘調査報告書本編』, 平安博物館, p.269-299.)。